

武門  
卷213

五事調和術氣釋義

# 延養性命圖

天保乙未  
臯月開雕

櫻寧室藏

頌諸同好  
不肯鬻市



養性祛序

有源而流必達矣。陰娘鍼  
何用長為。故櫻寧氏考尚  
地寒。內深外淺。術存智滿。  
簡要摘要。是其所長。而此

序

養性缺僅一細語。素生忙  
担。力役性為。為抑。聾於首  
而已。蓋妖魔孔魅。視風匱  
詣者。固不修焉也。

國初。一淳庵者。先生歎。

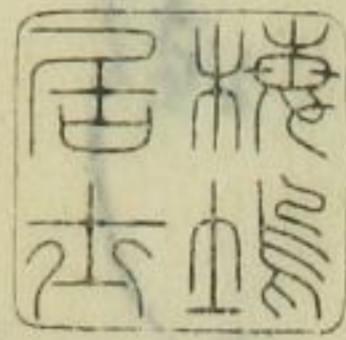
庵。淳庵。乃養生者。次。余。乃  
此書也。果見下。惑。無。兩。  
至斗。若。不。在。斐。歛。斬。妖  
魔。也。立。此。一。經。七。也。是。不。快  
暢。矣。雖。然。以。此。正。是。清。風。

明月多人看。俗作南樓。

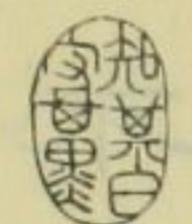
味涼斟得少。人知咄。

天保至夏。蘇長撰于梅鳴。

川上由書



題養性訣之首



荷。山元賢嘗有言曰。道本玄說。則玄妙不是道。有玄妙可玄常。而平常不是道。有平常可平常。則平常亦法塵也。道本無

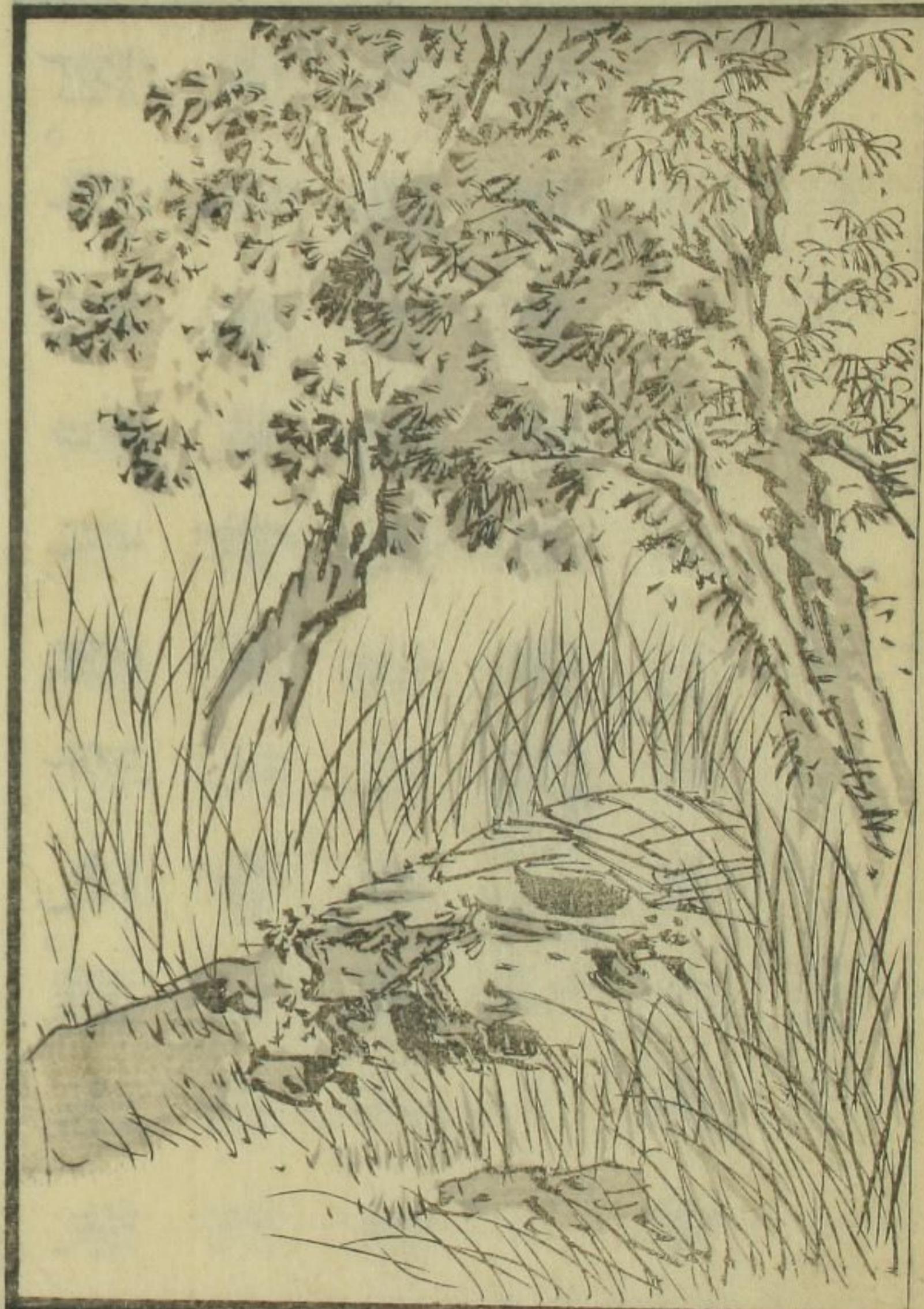
心。而。無。心。不。是。道。有。罪。心。可。  
說。宗。然。而。則。無。心。亦。讓。塵。也。道。卒。自。  
思。未。絕。嚴。所。不。忘。匪。妄。有。可。宗。有。然。可。可。  
言。

何。免。此。然。則。如。此。編。所。述。雖。未。能。  
望。而。辭。也。時。天。保。之。未。皇。日。既。  
攬。寧。居。士。識。



養性訣卷上 五車調和釋義

眞の攝生の道も。天地自然の性小循ひ。陰陽  
二儀岱絶れ小あり。その陰陽をへ。水火とい  
ふ小あらば。寒熱岱いふ小あらば。はよ天と  
地との二をさへていふ小をあらば。をて  
形體あるものと。假小呼ゞ陰となし。その形



體から小それくの運用あるを。名な々陽といふ。汝なまのあとにして。天地萬物も。皆この陰陽の二にを以うて生成ること。伏知ふちしむるまでの構こうと。まづかきふべし。さく人のおの陰陽冲和ゆうわの氣きを受得うべきて生まき。その本心ほんじんもと澹然虛靜だんぜんきよせいものふきども。攝生せきじやうの道みち小背こへれ。冲和ゆうわの性じやうを失ゆふよ。疾病やまいも生まト。氣稟きりんも變かトゆく。

正。故小人の心の善惡邪正。智愚勇怯の均らざるも。悉皆陰陽の調適とうしきと否うそざる小固こくて。骨肉血液の區く小別べつ。偏倚へんしたる質しつある小從こつ。その差さあるより。故小今人倫の道みちを明あきらし。六藝の淵底えんていを究きゅうんと欲ほくも。先その始はじ。生まの道みち小由よき小こ。事半じはん功倍ごくばいし。一いっを聞きや十じを知しの才さいとも發はくべし。かきば。

一舉小々心一術と痛苦を兩みづら治得。迄に  
あり。然成衆人も此理を知じ。生得たる賢人  
巧拙の性も。易べうらざるものとのみ思ひ。  
學向伎藝。凡ての事も。皆空小無用の地。小そ  
の身力成盡く。生涯覺悟ことよきへ。天性の  
自熱なるものを観得ること能ざる小よき  
べあり。固より父母小受得する稟賦の差小

より。具有の性質小別えれどあらねど。今  
よくその天性小循ひ。攝生の道を持て。勤行  
て息出とみけせば。其習慣の自然のとれた  
質とも變ト。善良の性となし。愚蒙ふるふ  
道理あり。古昔聖人の丁寧反覆く説教たま  
ふ孝悌仁義の道も。よほおの陰陽を調適て。

天地冲和の性成得せしもんたちの教か  
く。昔也我吾鑒事小こゑべ。入人身の天賦自然  
の欲。己ころあるを鑑察く。その所爲小往々  
病と治をる肯と。毫も異途あるあとなし。故  
小一切の病苦も皆其心の偏倚をころある  
より覆をのみるあと我。よく反求しぬゑべ。  
おきと治をる法も自己明得らるべ。たあと

みる。人くその親愛とれをひ。貽惡をあも  
ふ心の向うた小偏倚て。その身の修ざるよ  
リ。精神かのづから外小恥也。血常小上小衝  
逆。漸に下小粘結て。病苦も後起遂小ちそ  
の天年を終ること能ざるといふ。尤歎  
あれこと小あらばや。昔隋の世小陳箴とい  
ふ人あり。俗人張果おきと相。期年みらば

ふ死を江よと告たまへ候。その身の  
天台山の顕禪師小譚けをば。禪師あは小そ  
の耳目口鼻の外慾を絶く。食眠體息心の五  
事と調和。行住坐臥小止觀の法と修行をべ  
たあとを教へ爲しむ。陳歲謹ぞその教を受  
け是れ行ふこと數月。後張果小見也。張果大  
小驚き。奇なるうの道力。よく短壽を易く長

齡をなし。卒小よく死を越生を得たりと稱  
せ一ヶ。陳歲も七十五年を経て。病み  
く端坐たるは、死せることぞ。此法もと強小  
壽を延一生涯保ることと專小く役するに  
もあらゆど。止へ心識と愛養小をるの善資。  
觀も神解と兼覆をるの妙術と。顕禪師もい  
ひく。その外に放る心識代收攝す。一切外物



の為小昧まことさ色いろぬやう小との教けいみせべ。こせ  
と佛道ぶつじょう修行しゆぎょうの楷か模もと。車の雙輪そうりん鳥の兩翼りょうよく  
小譬こたとた。正ただトトドドも小もいふおとく。人の視聽みき  
言動ごんどうも皆まここ心こころ藏くらぶの運用うんようみせべ。假ま小こ也  
を陽よう小屬ぞく。身體身體耳目めぐらの形質けいしつあるものも。假ま  
小これを陰いんと名なく。この陰陽いんよう二氣二きも。もと天  
より受うけ得いたたる命めい義ぎの定限きまあるものも。假ま

お世代およいだい愛あい養やうて。晏えん小外物ほかのもの小役つかわ使つかぬやうにを  
せべ。その費用へらばところ少すくなきを以もつ。心こころ藏くらぶよく  
内うち小守まもり。血氣けいき自充足じゆうそく。壽じゅ義ぎも延年えんねんを道理ぢぢ  
あり。然おもを之の小反こころん。己おのが利欲りよくのためため。其體おのも  
膏あぶらを勞つく。晏えん小心こころ藏くらぶを費用へんようこと。其度とき小過こくわで  
きき小ち。陰陽冲和いんようとうわの性みやざを失うしなひ。定限きまある命めい義ぎ  
を耗散はうさんを以もつ。齡ねいと短たんこと法ほと知しぬ爲ため。今

その疾を治し生れ全せんあとを慮ら。先  
哲は血液を純粹小し。公誠然へ内の守を  
も一ふせしむるかららゆ。よく陰陽と冲  
和の性に復して成效を見こと能へば。故小  
その飲食と損そ。腸胃を強健小し。動作と節  
く。軀腔の化育を資け。吸呼戻調停。體容を  
寛舒小し。専外小馳の心識を收攝の術小

優ものあることより。故小謹でよくこれを  
護。その自然の道小循ひ。勤行ぐ息ざるをた  
小ち。陰陽自和適。真宰の令周行す。後來の病  
苦へ。旭日小霜の消るが如く。いつともく平  
治す。思慮計畫も以前小倍し。お色小由々長  
壽を得んこと。更小聲を容べらるべ。たとへ  
彼もたゞ心意を淨せんが為小設する法す

至とも。此小も假々病苦救救の捷徑とみし。  
お色小由々其氣質を鴻易一むるに至らむ。  
特攝生醫術のミコラビ。一切道の至極とを  
云ひ。天地の自然小率々逆ことある  
ものも。たゞ天地の自然小率々逆ことある  
ことを本旨とを名まこと。はゞ明なるあと小  
あらびや。よつ々今五事調和の義を釋こと  
左の如し。

世の人も。食岱減せば元氣乏弱み。膏梁と  
喫称也。身體枯瘦。壽命も促やう小れもふり。  
大魚味ふるあと小く。もと實理に疎より。う  
の來妄慮も發ことなり。おぞらく吾鑒より  
之が言べ。日く飲食をるところの。穀肉果蓏  
の精微の液。血小化。身體を滋養が為。小  
血。支毛髮の端液。往來順環。湏吏も息ヒ

と々く流行りと以ふ。おの血質も純粹清潔を  
良き也。然と酒食の慾を恣小一々。飽足こと  
代知也。膏梁代喫あと其度小退せむから。血  
液が漸々渾濁せにて。運化の機轉遲緩なり。  
身體自沈重起居も乏志あらば懶墮小み。り  
公志も從々骨閼道理と辨别あと能び。遂小  
ち病と釀て。治をべららざる小刻より。世に

所謂癥瘕。留飲。痼疾。脚痺。痛痺。卒痺。緩痺。痿躰。  
婦人子藏。諸病。その他。瘻瘍不治の病も。十  
八九も。飲食の慾減。渴小をよ。發もの多  
く。傷寒時行病。小も渴く。感冒也やも。故小  
まづその血液を再純粹精微小一々。傳輸に  
妨害。久らゝめん。欲小も。その飲食と筋  
慎小あらねば。効成成べし。如何と云

也。おの飲食成消化ところの腹裏の機轉  
也。譬へ臼の物然磨く肩と爲り如たもの小  
さ。身投て肩小せんこゝも。決して精細に  
よりがたし。はく力小あまきる物を擔べ。中  
途小委頓く。よく志とあろ小到こと能ざる  
がおこし。故小日々の食事にかならば節度  
を定く遇不及く。モベマ六七分を程限と

を乞ひ。腔肉常小餘裕あり。運化の機轉小  
妨害あるあとさく。心身自平穏小。血波渾濁  
こと。その飲食の宜忌も。病家須知小載  
たまへ。よくらの書を讀よ。此肯と參究。そ  
の身心共保養を。初門を總得べにあり。  
およそ人の睡眠裏も。血と頭上小論こと多  
く。腠理の守衛空疎るが故。横臥出で久

小過まごを覺さうざるをたから。漸しづく小上實じゆじ一 下虛きよ।  
頭部壅塞あなまのうとうつき。身體の諸液自潤獨ひとりり。心臟じんぞう  
已後えもれ愚蒙ふろう小なりやくものより。眠ねら眼まなこの  
食くと古人うきしも言いべ。のよらのよらも貪まつりて過度もどことな  
く。よく其則そのそと代定だいじやう寝ねとたから。よく精神せいじんの安あん  
定だいやうやう小こい。心身こころの勞倦ろうけんを補ほべきより。右  
代下だいげ小こい臥くむるも。藏府ちうぶの位置おひさまを以もて

いふいふとたから。必ひららせせねねばばららぬぬことこと  
す。はた。眠ねららせせんんををあららべ。かからばば食く  
量りょうを減へじ。食く多おけけききべ。腸胃壅塞こうびうとうつき。胸膈きょうかつ代  
下だいげよよ衡ひて。その氣きが上頭じょうとう中に逆さかり故ゆゑ小こ眠ね  
もままよよ從つ多く。食く寡すくなけけききべ。腰こし筋きんの衝う違たがも  
候まよよ強つよめららねね。眠ねことこと少すくなく。精神せいじん自じ充きゆう足そつ  
よ。身體からだの運化うんか却がくて健けんなり。よりて食眠くみんの多お

歩も相難あひづれぬとのよるあとと。よくく明むを  
たことより。よく毗こニ車ふを調停うぢぬものも。假を  
令へいのなる才德まいたくの人ひとなりとも。智慮ちり漸だら小昏こま  
闇くろにて。病苦やうきも漸だらて起る。まよも其まよ  
年壯せいしゆなるあひざら。何なんの事こと故ゆゑみに。領白りょうはく以い  
後ご精力せいけいのや、衰かわる頃ころに至いた。必重患ひじゆかん小係こわいて  
治ちを图ならざる。漸だらて老耄ろうまをる。或ある

卒ふつ宿すく小死こし死死招まねきものより。殊こと目め出だて枕まくらを難むず  
ぬ。尤おほ身み小害こがいありと。如何いかとみせむ。をべ  
て朝あさ寝ねをたかるもの。日ひ昇のぼに從つて。頭部とうぶ小  
血ちの迫のこと多き死死。かららば嗔怒ちんに鬱悒うゆき  
等などの惱うなき生ま。痼疾くごく。癪病きずび等などの患いざなを招まねく道理ぢ  
あり。或ある。この二事ふうじをよく調停うぢぬ人ひとも。貪とど  
眠ね者の一月いつげつを以もつ。吾われ小於あいても二月つまつの得え

あるをし。たとへ因小一時の得力ありとも。  
おきを一歳ねえ小通計を上げ。三百六十時もつ  
く二ヶ月の晝に當をし。おきの生涯に數をべ。  
その裨益えきぎは供大あひよりこじ。故によく無病  
小一まご。其の天年を全せんあとを希。及學向  
伎藝。各その極處ごくゆ光明めいめいと欲めうそのも。まづ飲  
食睡眠の二事へ常ふつ不足ふそくなるやう小をべ

たあと是格物致知の一端ひのちなるとを領うけよ。

く本編ほんべん次續よ。其度どを定をし。

體容たいようを正ただして。後のち小氣息いきと調和せいわよといふも。

周身の氣息いき四肢よのき下した小充實ちよつし。其四肢を輕虛けいゆ小し。頭面肩背胸腹かぶせむちもん四肢よのき四末よのまつ小。毫ひ毛け氣きの礙滯えいりとあろなく。物もの次つぎ提つま。小も車くるまを行く。小もこぢををして臍はら下したの力を用もちるやうにせんとの教じえ。おの

脣輪以下丹田の地も。人身の正中小々肢體と運用とおろの樞紐互に。上も鼻と相應し。天地間の大氣と鼻より一々吐納。その外氣とおの丹田より周身へ普達て。内外一貫によりて。生命を有ところの根本なり。故小婦人の懷孕をるもの。はこそ種子と。こゝ小生育を。また児の子宮中小住や。その

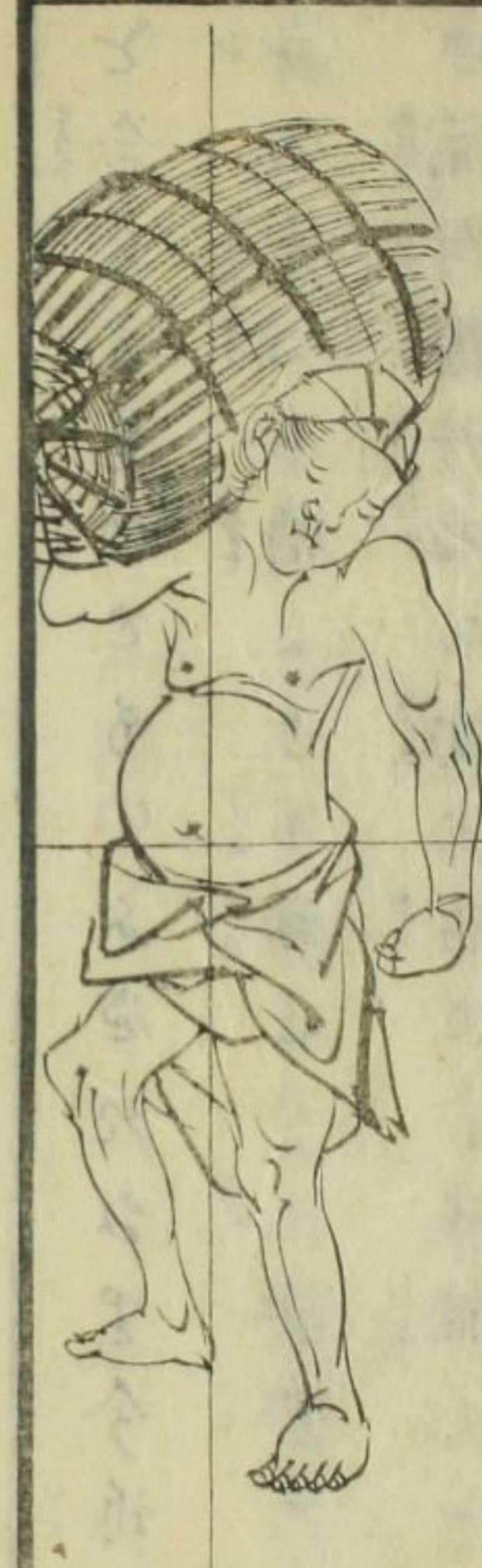
鼻自と脣尻覗やう小體を弓形小一て。鼻と脣とを相對し。被膜裏より母の丹田と通應し。れづら外氣感得し。おき天賦の妙機なり。そこ日月星辰の中夫小繫も。地界の萬物載て重とせざるも。悉皆その樞軸の運轉ある小由く。人を又かくのとく。身體と運轉をた太氣と。おの重心の丹田よ。

下輸ミツ。上下左右平等ヂヂ小一ヨコ周遍ヂヂ小也。

自天賊アマラスカの機キ閼ムカシ小合ヨコグ也。乞アヒに求メべて不可フ思イギ議ギ。妙用モウヨウ戎具ヨモギへ。變化ヘンカイ自左ヨコの德タクを有ハサウにもいたる也。そく然サク己ジ小也。心小憂愁ウシウ嗔怒ムカシの惱ノシも々く。身小痛苦イシミタリ疾疢ヨシカンの煩ハラハラとも受ルべ。苦界クエイ小在アリ苦伐クバ知ル樂境タチキ小住ヤマツ樂ヨリ小著ヨリべ。うる成天アマニ地と其ソノ徳タクを同ドく。日ヒ月ツキとその明アマテ

を合ヨコするものとものいふ也ナニヤ。今近チカ人ヒト身ヒトの中心ミンチも脐ヒダより下シモ腰ヒダより上シモ腰ヒダと小腹コウハの間マジ所謂アマガシ丹タケ田ダの地ジに在アリこと戎驗ヨモギ人ヒト。假令ヨシロベ。背セ小重キナヒを負セべ。體ヒトツへかみらば前マサニ小屈ヨリ。前マサニ物モノを提ハシべ。背セものならを後アヒへ仰アヒ。右ヨコ小挈ヨコ也ナニヤ。左シモへ側シタき。左シモ小根ヨコを右ヨコに傾シカシく。おの抵アヒ對アヒも。必ハシその物モノは輕重カタカタ小從ヨリひ。前後マサニ左右ヨコの重力カタカタ小任ハシ。

づの身が重



行住擔<sup>たん</sup>提<sup>て</sup>の運動也。  
さべく臍下丹田と  
身體の正中かく。  
左右前後平等小必  
天地の直線を外ることなやうかを  
自然の妙機也。  
よく本文を讀得して  
考ふべし。



。その中心に成<sup>し</sup>る。とたとへば。稱<sup>え</sup>銘<sup>めい</sup>と以て秤衡<sup>はかり</sup>と平等<sup>ひやう</sup>かを<sup>ら</sup>る。如く。その身體<sup>からだ</sup>の作用<sup>きじゆう</sup>をざるやうに心<sup>こころ</sup>と身<sup>み</sup>の中心に成<sup>し</sup>る。貫<sup>ぬき</sup>るも。地界<sup>たいかい</sup>の中心より人身の中心に成<sup>し</sup>る。貫<sup>ぬき</sup>たる直線<sup>一直線</sup>を外<sup>はず</sup>ると身<sup>み</sup>やうにこの天<sup>あま</sup>機<sup>き</sup>の妙<sup>みょう</sup>機<sup>き</sup>小由<sup>こゆ</sup>てなり。今體<sup>からだ</sup>容<sup>よう</sup>呼吸<sup>ひきあひ</sup>を調<sup>しゆ</sup>るも。侮<sup>いぢ</sup>ふおの中心を身體<sup>からだ</sup>の樞<sup>くわ</sup>油<sup>ゆ</sup>にさへ。上下前後<sup>ぜんご</sup>

後左右平等<sup>ひやう</sup>に。一氣<sup>いつき</sup>の命令<sup>めいれい</sup>よく行<sup>は</sup>く。動靜<sup>どうけい</sup>云<sup>い</sup>為<sup>め</sup>。自過<sup>じが</sup>不及<sup>つけど</sup>の差<sup>さ</sup>るらへりんがためなす。然<sup>ち</sup>とそし<sup>し</sup>おきに反<sup>そむ</sup>。身體<sup>からだ</sup>に偏倚<sup>へんし</sup>され<sup>は</sup>こころあせむ。その偏倚<sup>へんし</sup>小後<sup>こご</sup>く病苦<sup>やまい</sup>となるなり。今おき成衆人<sup>せいしゆじん</sup>小試<sup>しき</sup>る。小腹<sup>おなか</sup>脇<sup>わき</sup>下充<sup>あつ</sup>實<sup>じつ</sup>。大腹<sup>おなか</sup>小支<sup>そし</sup>結<sup>つむ</sup>瘡<sup>う</sup>癰<sup>は</sup>えたもの。無病<sup>むびやく</sup>なるのみからば。精神<sup>じんじ</sup>よく安定<sup>あんてい</sup>て。仁義<sup>じんぎ</sup>の道<sup>みち</sup>を志<sup>し</sup>決<sup>け</sup>。

断るみらばよきものなり。ぬる胸腹支憲。心  
下中腕の邊壅塞。臍下小力みなれどのち。必宿  
疾ありて。且治へがゆく。その思慮定ば。愚癡  
蒙昧に。こそ。無事依然摸糊。やゝもとをき。耳  
目の鷙小惑をもく。飲食もまゝ停滞。ごち小  
よ。多く天壽を全くるかと能ばたとへ偶壽  
を得たるを。老耄へそ車用にたちがたれも

の多し。方今昇平二百餘歲。人く安逸に耽り。  
歡樂小習て。たゞ富貴榮華戯慕ひ。名聲功利  
を競逐。飽足おと成知ざるが故小。その心  
志外小のミ馳そ。内小守もの多く。その外物  
を攝受。おろの耳目。鼻の竅の。身へ。一  
身の血氣。とも小胸腹諸藏を。よへくと  
引え。腔内筋膜の緊着が。よく。藏府もお

さぐく頭面裡小。捨去も一つ無状なる也。  
身體も俗小所謂將舉だを。とあらんにゆ  
り。脇下空洞にて。物なしが如く。太氣の令行  
じ。下元の力虛乏し。腰脚に力なく。腸胃漸  
に挾溼る。日くの飲食停滞敗壞て。血液の  
運輸怠慢なるなり。かくて。病發生せしも  
の。又。人軀となることを。全く天性小戾り。

自然の對法失る。故ぞ。か。般人の  
平常観る。小たどへ亢強やうるも。大事  
小臨くも。必周章狼狽く。思慮定ふく。終小も  
癡獣名をとる。先も墮竈小。氣宇み  
きが多きとのなり。古昔小。體海谷神。天谷泥  
丸宮。或とも上丹宮。あるひも頂上金剛宮か  
ご。さまぐの名稱あり。頭中少一一身を主

宰さきとおろの心しん藏くらぶを在あとる。もー然ぜんらべ。其ま  
外ほか物ものが攝さく受うけてころの耳みみ目めと鼻はな。頸腦あきまに近ちか  
き面部おもて小こ開ひらて。身體からだを使つか役わざ小こ便べん利りやう小こ  
たたるも。まさ天あま賦ふの妙めう巧こうなるべけけど。その  
耳みみ目めと鼻はなの寛ゆ脯より。霧きりの如ごく烟けいのあとに  
もの悪あく侵すすく。咫むす尺しゃくを辨きて能こなば。凡ふ常じょうの事ことをを  
て恰まことに物もの摸さぐ索さぐが如ごくよるが故ゆゑ。

おのきおほきが有ある。天地と混融こんゆう一體いつたいなる靈妙きめうあたら  
の心こころ藏くらぶも。譬たとへ糞壤ふくようの中なかに埋うる金玉かなぎょく小均こくわん  
く。光耀ひかり成なれるの期ときあるととく。やく耳みみ目め  
の微すこ小體膚みづよを勞いたし。心志こころを苦くるめ。一生いっせいと名利めいり  
れ菴あいわんに奔まよ走まよる。譬たとへ客店きゃくてんの居室じゆしつの己おのが意おも  
愜まことにざるを憂う。曉あゆ快こころ睡ねざるが如ごく。豈愚あはぢ  
の甚まことにさものものがあらげあらげや。是これをよくく其その物もの小こ

顧已た小も。唯一念の懲と恩と能ばし。達  
小禽獸と類を同うし。かく天壽は短小も至  
が故小。今攝生の第一義とせるものも。たゞ  
其懲戒思にありとへいふなり。故小病家須  
知小。畏と恩との二と攝生の首也。力と儉  
己身以て之を守て發示せしも。六色天真を  
全する自然の道小率より。かれれば夫婦父

子君臣朋友の人倫ある小徒也。そきくの道  
も教と待べし。自具有がよとく。攝生の道  
も。又天地自然の條理小由也。遂となれやう  
小をる法でのとにて。他小求咎たものにあ  
らば。おのやあせども。かく利慾に心の昧も  
てたるものと。卒小その本性小復しめんと  
をるも。大小難事小一々。人く懊惄嘆沮執拗

疎放哉。自己の性格なり。或も親の氣質を受  
たるるをあと、裁量す。改んとれをふ者奉  
けむべ。そきらの為小も先その性格とをる  
をのち。其法に暫放下す。只飲食の量を定。  
睡眠の則成たて、さそきより體の倚側  
と戒め。呼吸を調和しめて行住坐臥小己の  
心残らず。瞬時も忘失とみらむを。そ

の心の沈るとの浮との。いつともく綱停す。  
胸腹寛舒とみ。腑下自然に充實す。頭肩漸  
小脛く。腰脚小力用度す。その心の偏倚も自  
ら改ゆくに従ひ。後來の痼疾。癪痕。留飲をべ  
て肩背に結塞でころの病。婦人藏躁。月信不  
綱整の他。一切沈痼も。藥石の力を待び。そ  
平治小至きべ。この性格とをるであろうの氣

質も。何處か人を失が如く。心意坦懐に。言一行  
柔順小なると。その妙舉をいふ者らば。若  
よく斯の如くある境小到を得の後も。假令  
健啖過飲でも。體にさぬでの妨害と為ざる  
のみ。廢痼病を得て困苦不とのと。まづも  
無ものなり。且を畜て心も形に隨るものなる  
こと。衣服を整へ威儀端麗とするこたと。宴居

放緩小一たるこたとも。心の趣をころ自興  
の故也。病を去意戒轉しむるの捷徑も。おの  
食眠體息を調適小優れる術ある者らば。  
それ人の世に在や。白駒の隙過か如く。涯  
ある生を吸く。極みた利欲妄想の為小病と  
抱く天命を促とも。己が心識にかゝる徳性  
と異有と伏知ば。徒小形體の限を彈て。飽足

さるが故なり。も一人よく寡慾の攝生の第  
一義なるとを知り得てからも。強に五車潤  
を假溌でもなく。病苦もなくして泰然とその  
天壽を終る。子孫の榮とも期を定めたり。故  
に世人よくくちの道理を領んとを庶幾の  
み。

養性訣卷之上

